

## 第8編 橫壁勝沼Ⅲ遺跡



# 第1章 既往の調査

これまで横壁勝沼Ⅲ遺跡では、今回の土地改良事業に伴う発掘調査を行うに当たり、発掘調査範囲を確定するための試掘調査が実施されたのみであり、本調査は今回が最初の発掘調査事例である。試掘調査は、平成29年10月24日～11月8日まで行われ、中央の急峻な斜面を挟んだ南北に平地をもつ事業予定地のうち、北の下段の平場の試掘69号トレンチから土師器を作った焼土遺構1基と土坑1基が検出されたため、下段の平場を遺跡公園地「横壁勝沼Ⅲ遺跡（No.224）」として新規に登録し、記録保存調査を行うこととなった。

# 第2章 調査の経過

発掘調査は、平成30年5月10日から開始し、同年8月28日に終了した。

5月8日、表土掘削を開始する。土地改良事業に伴う発掘調査のため、表土層を水田耕作土と下層土とに分けて掘削を行う。5月29日、1面の遺構掘削を開始する。

6月8日、1面の表土層掘削が終了する。6月18日、空中写真撮影・測量を実施し、1面の調査が終了した。6月27日、2面の覆土層の掘削を開始する。

7月2日夜、調査区の南西壁の一部が湧水により崩落する。7月3日、崩落を確認し、周辺の立ち入りを規制する。町教育委員会に連絡し対応を協議する。7月11日、調査区南部に下層確認のためのトレンチ掘削を行う。7月12日、町教育委員会と協議し、調査区南部の取り扱い及び南西壁の整備方法を決定する。2面南部の空中写真撮影を実施する。7月13日、南西壁の整備を開始する。2面の遺構掘削を開始する。7月17日、SI01の掘削を開始する。7月19日、南西壁の整備を完了する。7月23日、2面の覆土層の掘削が終了する。7月30日、調査区西部の台地上のトレンチ掘削を開始する。

8月20日、2面の空中写真撮影を実施する。8月22日、SI01の掘り方の掘削を開始する。8月27日、2面の遺構掘削を完了する。8月28日、2面の測量を完了する。器材等の撤去を行い、調査を終了した。

# 第3章 基本層序

今回の発掘調査の基本層序は、第289図のA・B・C・D地点の4か所で確認した。A地点は高地、B～D地点は低地の土層である。高地と低地では堆積状況が全く異なり、基盤のローム層（VI層）以外は対応させることができなかったため、別の土層番号を使用した。

所によっては、下位に斑紋（ $\phi 0.1 \sim 0.5cm$ ）微量含む。試掘66～69号トレンチの2層を細分した層。

第I層 黄褐色土：表土である。粘性はなく、しまりは弱い。YPk（ $\phi 0.1 \sim 0.3cm$ ）を少量含む。根や葉を含むことから、比較的最近に堆積した土層か。

第II層 黒褐色土：粘性は弱く、しまりはある。YPk（ $\phi 0.3 \sim 1.0cm$ ）を含む。I層が堆積する前の表土層か。

第III<sub>1</sub>層 黑褐色土：粘性は弱く、しまりはある。YPk（ $\phi 0.3 \sim 1.0cm$ ）を少量含む。現代畑の下層土に相当する層のうち上層にあたる。

第III<sub>2</sub>層 暗褐色土：粘性は弱く、しまりはある。YPk（ $\phi 0.3 \sim 1.0cm$ ）を少量含む。現代畑の下層土に相当する層のうち下層にあたる。

第IV層 黑褐色土：粘性は弱く、しまりはある。YPk（ $\phi 0.1 \sim 2.0cm$ ）を含む。炭化物（ $\phi 0.3 \sim 0.5cm$ ）を微量含む。高地上の遺物は主にこの層から出土している。古代以前の表土か。

第V層 黑褐色土：いわゆるローム漸移層である。粘性は弱く、しまりはある。ロームブロック（ $\phi 0.5 \sim 2.0cm$ ）を含む。YPk（ $\phi 0.5 \sim 1.0cm$ ）を微量含む。



第287図 調査区位置図(1/2,500)

第VI層 にぶい黄褐色土：ローム層である。粘性は弱く、しまりはある。 $Y_{PK}(\phi 0.3 \sim 1.0cm)$ を少量含む。試掘 66 ~ 69 号トレチの 6 層に相当する。

第A<sub>1</sub>層 黒褐色粘土：現代水田の耕作土。粘性があり、しまりはやや弱い。砂礫 ( $\phi 0.5 \sim 4.0cm$ ) 含む。斑紋 ( $\phi 0.1 \sim 0.5cm$ ) 少量含む。試掘 66 ~ 69 号トレチの 1 層に相当する。

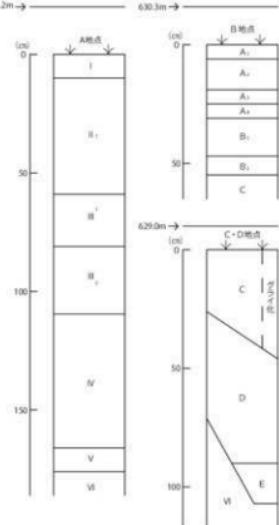
第A<sub>2</sub>層 黄灰色粘土：現代水田の下層土のうち上層にある。粘性は強く、しまりはある。斑紋 ( $\phi 0.1 \sim 1.0cm$ ) 多量含む。 $Y_{PK}(\phi 0.1 \sim 1.0cm)$  少量含む。試掘 66 ~ 69 号トレチの 2 層を細分した層。

第A<sub>3</sub>層 にぶい褐色粘土：現代水田の下層土を分層する鉄分・マンガン集積層である。粘性・しまりともにある。斑紋 ( $\phi 0.1 \sim 0.5cm$ ) 少量含む。 $Y_{PK}(\phi 0.1 \sim 1.0cm)$  微量含む。試掘 66 ~ 69 号トレチの 2 層を細分した層。

第A<sub>4</sub>層 黄灰色粘土：現代水田の下層土のうち下層にある。粘性は強く、しまりはある。 $Y_{PK}(\phi 0.1 \sim 1.0cm)$  少量含む。場所によっては、下位に斑紋 ( $\phi 0.1 \sim 0.5cm$ ) 微量含む。試掘 66 ~ 69 号トレチの 2 層を細分した層。

第B<sub>1</sub>層 黒色粘土：1面水田の耕作土である。粘性があり、しまりはやや弱い。砂礫 ( $\phi 0.1 \sim 1.5cm$ ) 含む。 $Y_{PK}(\phi 0.1 \sim 0.8cm)$  微量含む。試掘 66 ~ 69 号トレチの 3 层を細分した層。

第B<sub>2</sub>層 黄灰色粘土：1面水田の下層土である。粘性は強く、しまりはある。 $Y_{PK}(\phi 0.1 \sim 1.0cm)$  少量含む。試掘 66 ~ 69 号トレチの 3 层を細分した層。

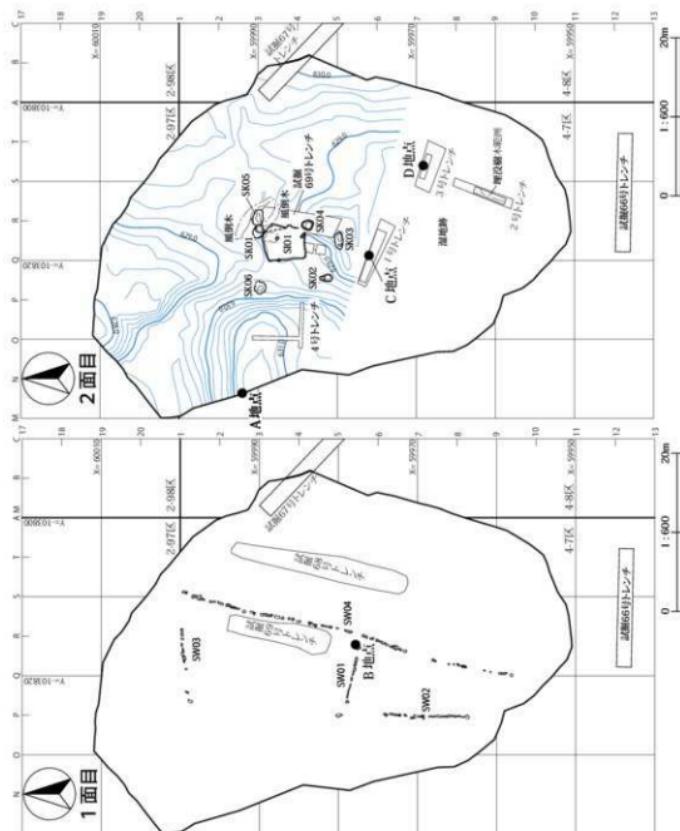


第288図 基本土層柱状図(1/20)

- 第C層 黒褐色粘土：南部の湿地の埋没土の上層である。粘性は弱く、しまりはある。Y<sub>Pk</sub> ( $\phi$  0.1 ~ 0.5cm) 微量含む。場所によってはさらに細分されたり、グライ化する。
- 第D層 黒色粘土：南部の湿地の埋没土の下層である。粘性は弱く、しまりはある。Y<sub>Pk</sub> ( $\phi$  0.1 ~ 0.5cm) 少量含む。
- 第E層 黒色粘土：南部の湿地の埋没土の最下層である。粘性は弱く、しまりはある。炭化した樹木根が埋没する泥炭層である。

## 第4章 検出された遺構と遺物

### 第1節 遺跡の概要



第289図 調査区全体図(1/600)

横壁勝沼Ⅲ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字勝沼に所在する平安時代の一軒家と近世以降の水田耕作に関する遺跡である。遺跡は、吾妻川流域地帯に属し、吾妻川の支流である深沢と白岩沢に挟まれた吾妻川右岸の中位段丘面の南方、丸岩山の北西面の山脚地帯に位置する。吾妻川支流の東沢と白岩沢に挟まれた馬の背状の尾根の東面に立地する。調査区の西と南は尾根の急斜面がそびえ立っており、東と北は急こう配の谷地となっている。調査区内では、中央から南側が低くなっている。湧水と尾根からの流水によって湿地となっている。現代では、この環境を利用して水田が営まれている。東側と西側は一段高く、西側の高地部分はその上面が平坦である。中央部の北側は、現在東西の高位部分と比べて低地であるが、中央南の低湿地よりもやや高く乾燥した状態であることがから、水田の造成時に削平されたものと考えられる。本来は、中央南の低湿地を囲うように高地部分がめぐっていたものと考えられる。標高は 630.0m ~ 634.0 m である。

今回の発掘調査は横壁勝沼Ⅲ遺跡の第 1 次調査にあたる。調査範囲は水田部分と西側の高地部分にあたり、大字横壁字勝沼 851 外に所在する。調査範囲の南側半分は湿地帯であるため、遺構は北側の高地寄り約 1 / 4 に分布している。確認された遺構は、平安時代と考えられる竪穴住居跡 1 軒、陥し穴 1 基、土坑 4 基、近世以降の土坑 1 基、石積 4 条に区分された水田跡 3 面である。出土した遺物の種類は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、軟質陶器、陶磁器、ガラス製品、石器などで、その数量はテンバコで 1 箱分であった。

## 第 2 節 平安時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴住居跡

SI01 (第 290 ~ 292 図 / 第 42 ~ 44 表 / P L 42・43)

**位置** 4 - 7 区 Q - 3 **重複関係** SK01・04 と重複し、SK01 より古く、SK04 より新しい。**遺存状態** 東壁を SK01・カクラン・試掘 69 号トレンチに壊されているが、遺存状態は比較的良好である。**覆土** 黒褐色と暗褐色の粘土が基調で、人為堆積を示す。

**平面形と規模** 平面形は隅丸長方形。規模は主軸 5.52 m、副軸 4.04 m、深さ 46 cm、底面積が推定 19.18 m<sup>2</sup>。**主軸方位** N-81°-E **壁・壁溝** 壁高は東壁で 28 cm、西壁で 34 cm、南壁で 26 cm、北壁で 29 cm。ともに外傾して立ち上がる。壁溝は確認されなかった。**床面** 直床式で、貼床が北東部で確認された。やや南西方向に傾斜するが、概ね平坦。**柱穴** P 1 ~ P 4 まで確認された。平面形は円形・隅丸三角形。P 1・2・4 は位置から主柱穴、P 3 は壁際のため壁柱穴と考えられる。それぞれの規模は、第 42 表に記載する。**カマド** 東壁の中央南寄りに位置し、東部を試掘 69 号トレンチに壊されており、遺存状態はあまり良くない。長さ 58 cm 以上、幅 74 cm 以上。火床面と考えられる窪みが 6 cm 堀り込まれているが、底面に焼土は認められなかった。地山のロームを掘り込んで外壁を造り、天井部に切石が支持材として使用されていた。**その他の施設** 貯蔵穴も床下土坑も確認されなかったが、北東隅からカマドにかけての東壁際がわずかに落ち込む。貼床はこの落込みの範囲と比較的一致する。**遺物検出状況** 土師器、須恵器などが住居の覆土中からまばらに出土している。カマドから土師器と小さな骨片が出土している。掘り方からは出土しなかった。**遺物** 出土遺物のうち、土師器 1 点、須恵器 6 点を図示した。土師器はコの字のくずれた壺で、須恵器は羽釜の底部、杯・椀・壺である。須恵器杯の底部には、内面の大半に研磨痕や擦痕が見られる転用砥石と考えられるものや、底部に補修痕が確認されるものがある。**備考** 本遺構は、中型の竪穴住居跡である。縚属時期は、出土遺物から 10 世紀前半と考えられる。

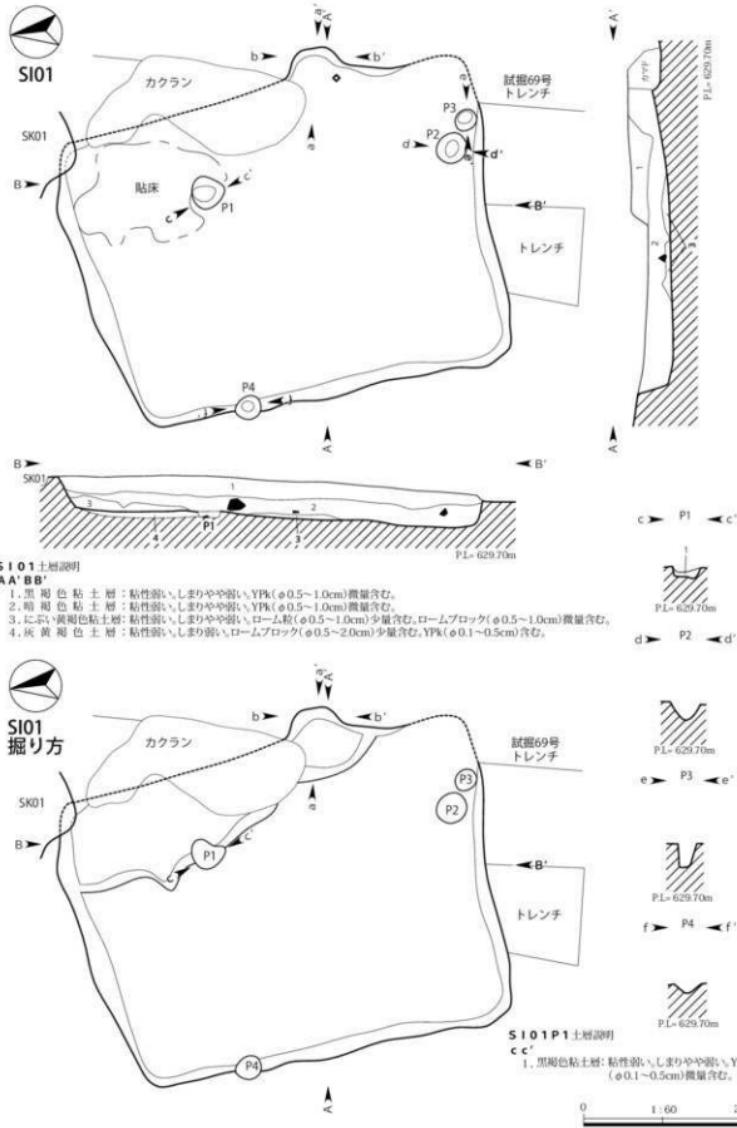
第 42 表 SI01 ピット計測表

	P1	P2	P3	P4
長軸長 (cm)	42	39	28.5	33
短軸長 (cm)	39	36	25.5	28.8
深さ (cm)	15	24	31.5	10.5

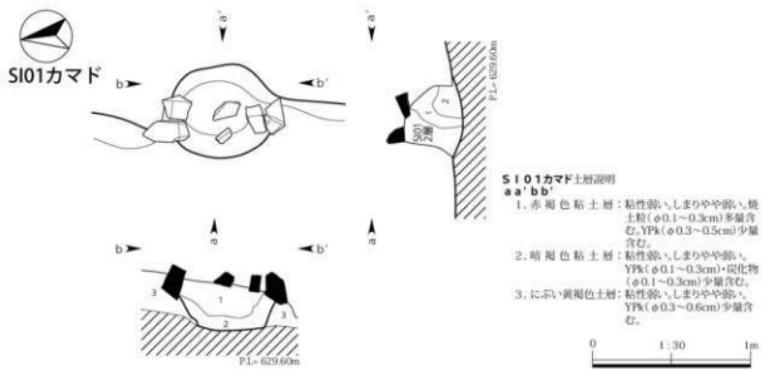
### (2) 陥し穴

SK04 (第 293 図 / P L 42)

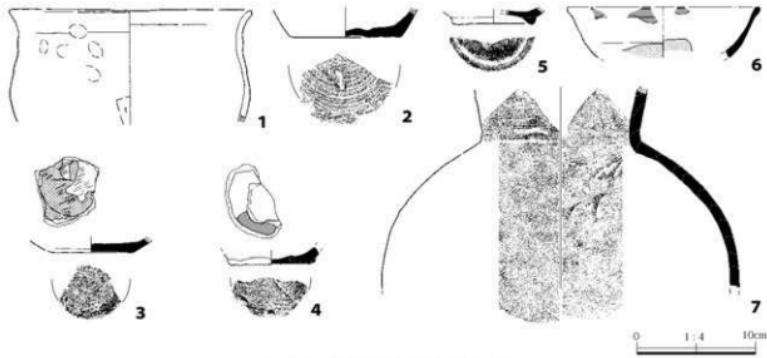
**位置** 4 - 7 区 Q - 4 **重複関係** SI01 と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態** 良好。**覆土** 黒褐色土と褐色土が基調で、自然堆積を示す。**平面形と規模** 平面形は上面形、下面形ともに不整円形。規模は



第290図 SI01・掘り方実測図(1/60)



第291図 SI01カマド・カマド掘り方実測図(1/30)



第292図 SI01出土遺物実測図(1/4)

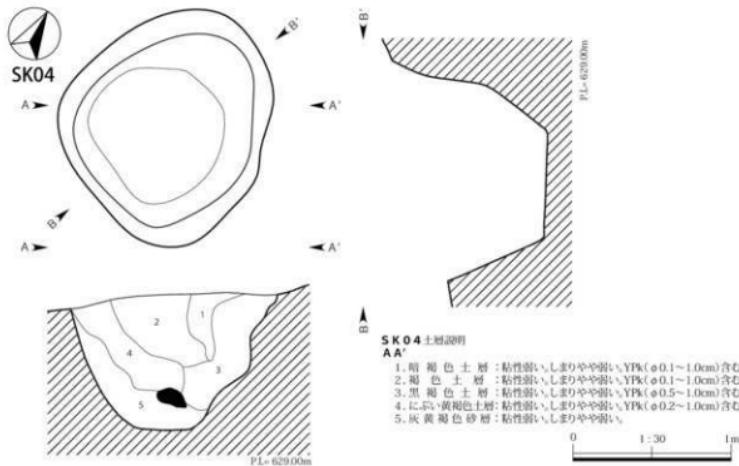
長軸 136cm、短軸 130cm、深さ 74cm。 主軸方位 N-14°-E 壁面 北壁は下位が大きく外傾して立ち上がり、上位が外傾する。他は下位から上位まで直ぐ外傾して立ち上がる。 底面 概ね平坦。 遺物なし。 備考 黒色土が深いU字形に、ローム質の褐色土がU字内に堆積していることから、平安時代の陥し穴と考えられる。平面形は円形で、古代の陥し穴によく見られる上面形が橢円形、下面形が長方形を呈する形態の陥し穴とは異なる。

### (3) 土坑

SK02 (第294図)

位置 4-7区P-4 重複関係 なし。 遺存状態 良好。 覆土 黒褐色土が基調で、人為堆積を示す。

平面形と規模 平面形は北壁が舌状に広がる不整円形。規模は長軸 162cm、短軸 88cm、深さ 22cm。 主軸方位 N-0° 壁面 東壁は内傾し、北壁は大きく外折する。他は外傾して立ち上がる。 底面 東に傾斜する。 遺物 なし。 備考 遺物もなく時期不明であるが、2面で検出されたため、平安時代として取り扱う。



SK03 (第 294 図)

**位置** 4-7 区 Q-5 **重複関係** なし。 **遺存状態** 良好。 **覆土** 黒褐色砂が基調で、人為堆積を示す。  
**平面形と規模** 平面形は楕円形。規模は長軸 218cm、短軸 100cm、深さ 47cm。 **主軸方位** N-85°-E  
**壁面** 外傾して立ち上がる。 **底面** 東側にやや傾斜するが、概ね平坦。 **遺物** なし。 **備考** 遺物もなく時期不明であるが、2面で検出されたため、平安時代として取り扱う。

SK05 (第 294 図)

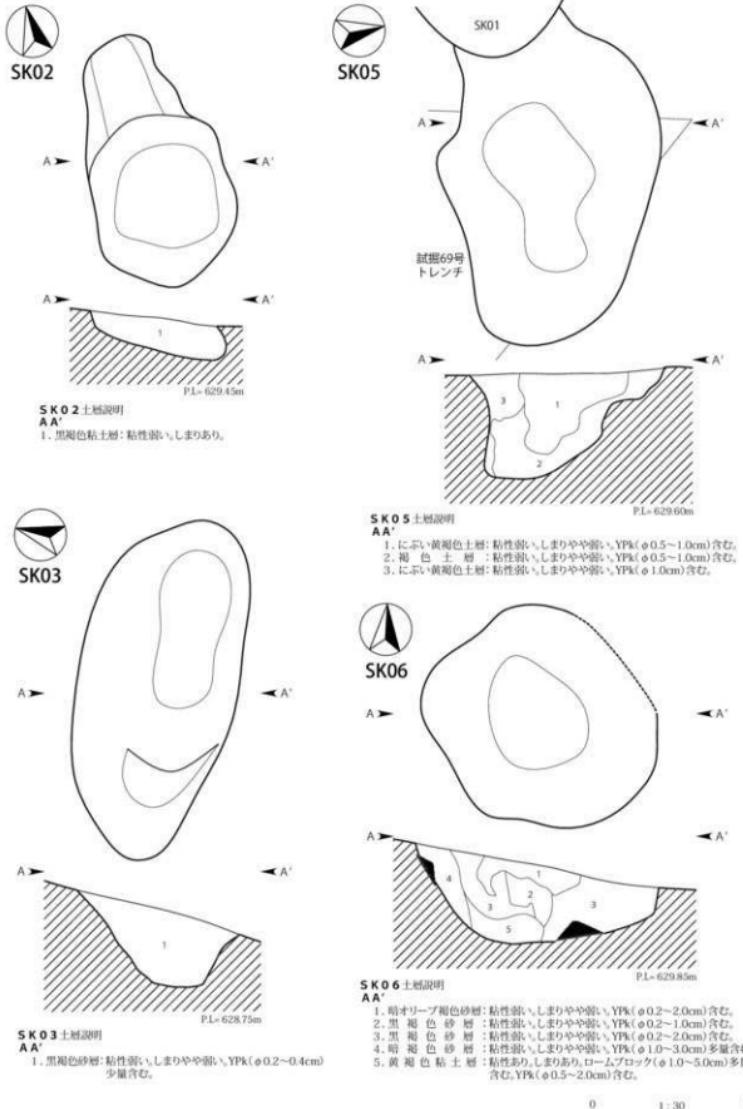
**位置** 4-7 区 R-3 **重複関係** SK01 と重複し、SK01 より古い。 **遺存状態** 良好。 **覆土** 褐色土が基調で、自然堆積を示す。 **平面形と規模** 平面形は楕円形。規模は長軸 178cm 以上、短軸 112cm、深さ 66cm。 **主軸方位** N-80°-E **壁面** 東壁と南壁は内傾し、西壁と北壁は大きく外傾して立ち上がる。  
**底面** 概ね平坦。 **遺物** なし。 **備考** 試掘 69 号トレンチで検出された土坑の一つ。遺物もなく時期不明であるが、2面で検出されたため、平安時代として取り扱う。平・断面形から倒木痕の可能性がある。

SK06 (第 294 図)

**位置** 4-7 区 P-3 **重複関係** なし。 **遺存状態** 良好。 **覆土** 黒褐色砂が基調で、人為堆積を示す。  
**平面形と規模** 平面形は楕円形。規模は長軸 144cm、短軸 100cm、深さ 52cm。 **主軸方位** N-21°-W  
**壁面** 東から南壁はほぼ垂直に立ち上がり、西から北壁は外傾して立ち上がる。 **底面** 概ね平坦。 **遺物** なし。 **備考** 遺物もなく時期不明であるが、2面で検出されたため、平安時代として取り扱う。

#### (4) 湿地跡 (第 289 図)

調査区の南部は湧水と山から水が流れ込んでおり、湿地となっている。下層の状況を確認するためにトレンチ掘削を 3 箇所行なったが、いずれもグライ化した土壤が確認され、遺物は出土しなかった。1号トレンチでは西側高地の基盤ローム層が東に傾斜していることが確認され、谷地形と推測された。2・3号トレンチでは、下部で炭化した樹木根が埋没する泥炭層が確認された。



第294図 SK02-03-05-06実測図(1/30)

### 第3節 近世以降の遺構と遺物

#### (1) 石積遺構

SW01 (第295・296図／第44表／PL 42・43)

**位置** 4-7区P・Q-5 **重複関係** なし。 **遺存状態** 上段が1~2段程度壊されている可能性が高いが、下段は1~3段残存し、比較的良好。 **覆土** 黄灰色粘土が基調で、人為堆積を示す。 **規模** 長さ97cm以上、最大幅40cm、高さ30cm以上。 **長軸方位** N-74°-W **遺物** 覆土より肥前系染付碗の口縁部片が出土し、図示した。筐のような単純な草文が認められる。平戸・三川内窯の三期（17世紀後半）に酷似したもののがみられる。 **備考** 石積の正面は北向き。出土遺物から近世以降と推定される。

SW02 (第295図／PL 42)

**位置** 4-7区P-6~8 **重複関係** なし。 **遺存状態** 2~3段残存し、比較的良好。 **覆土** 褐色土が基調で、自然堆積を示す。 **規模** 長さ110cm以上、最大幅55cm、高さ87cm以上。 **長軸方位** N-3°-E **遺物** 覆土から近現代の染付瓶片が1点、石積の下から杉と推定される枕木が出土したが、図示しなかった。 **備考** 石積の正面は東向き。調査区西側高地の東斜面に構築されており、最も遺存状態が良い。出土遺物から近現代と推定される。

SW03 (第295図)

**位置** 4-7区P-R-1 **重複関係** なし。 **遺存状態** 上段が1~2段程度壊されている可能性が高いが、下段は1~2段残存する。残存長が最も短く、遺存状態はあまり良くない。 **覆土** 黄灰色粘土が基調で、人為堆積を示す。 **規模** 長さ95cm以上、最大幅12cm、高さ28cm以上。 **長軸方位** N-85°-E **遺物** 覆土中から繩文深鉢片2点、石器1点、古代土師器片5点が出土。遺構に伴わない混入物と考えられ、図示しなかった。 **備考** 石積の正面は北向き。SW01・04と共に水田を区分していることから、SW01・04と同様に近世以降と推定される。

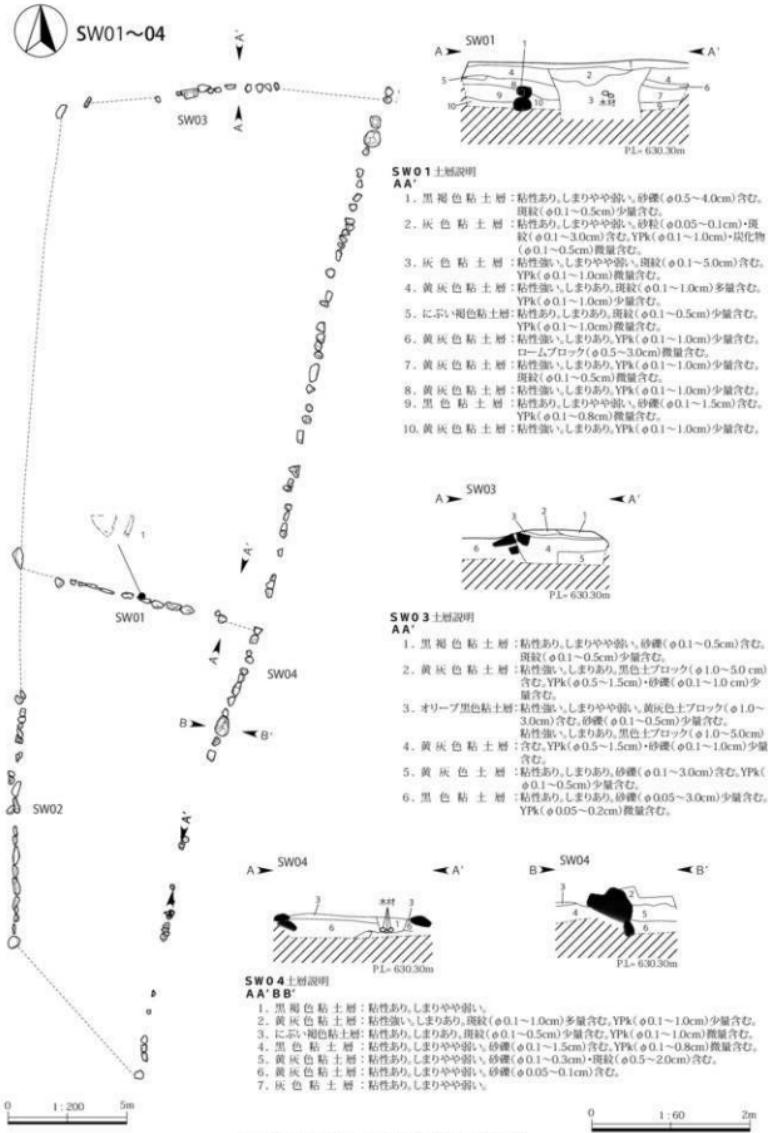
SW04 (第295図／PL 42)

**位置** 4-7区P-S-1~9 **重複関係** なし。 **遺存状態** 上段が1~2段程度壊されている可能性が高いが、下段は1~2段残存する。残存長が最も長く、比較的良好。 **覆土** にぶい褐色粘土が基調で、人為堆積を示す。 **規模** 長さ434cm以上、最大幅40cm、高さ63cm以上。 **長軸方位** N-14°-E **遺物** 近世陶磁器片1点、近現代陶磁器片5点が出土したが、図示しなかった。 **備考** 石積の正面は東向き。出土遺物から近世以降と推定される。

#### (2) 水田 (第289・295図)

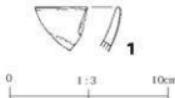
1面は、石積群(SW01~04)によって3つに区画される。区画内の土壤は、グライ化された粘土層であり、SW04の東側の土層で斑紋(斑鉄)が、SW01の南北の土層で石積を境界とする鉄分集積層が認められたことから、水田土壤と判断した。水田の耕作面は、現代の水田耕作によって壊され、残存していない。各石積は正面をもち、石積の前後で高低差があり、棚田状であったと考えられる。SW02~04は現代の水田域の境界と重なる位置にあり、SW01も古い地図の境界と重なる。SW04の東側の水田は現代ではさらに細分されるが、石積などの境界の痕跡は認められなかった。SW04の正面は東向きであり、東西の水田の高低が現代と逆である。また、西側高地の東斜面の北部には石積の痕跡が認められず、SW02の下で湧水などの地盤対策の枕木が出土していることから、SW02は他の石積と異なり後から構築されたものと考えられる。

SW01・04の覆土(現代水田の耕作土)から近世の陶磁器片と近現代の陶磁器片が出土していることから、水田の耕作時期は、近世以降から近現代と考えられる。地権者の方からの聞き取りでは、明治期には水田耕作



第295図 SW01～04実測図(1/60・1/200)

しており、大正生まれの方の記憶では石積を埋めた記憶はないとのことである。石積より下位の土層から時期を特定できる遺物が出土していないため、より詳細な構築時期の特定は困難な状況である。



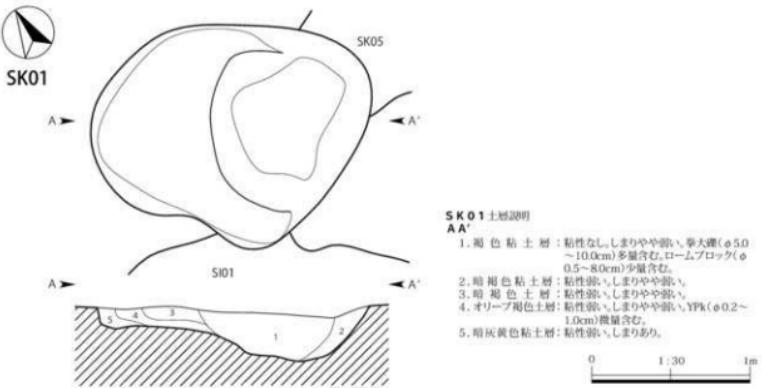
第296図 SW01出土遺物実測図(1/3)

### (3) 土坑

SK01 (第297図)

**位置** 4-7区Q-3 重複関係 SI01・05と重複し、本遺構の方が新しい。 **遺存状態** 良好。 **覆土**

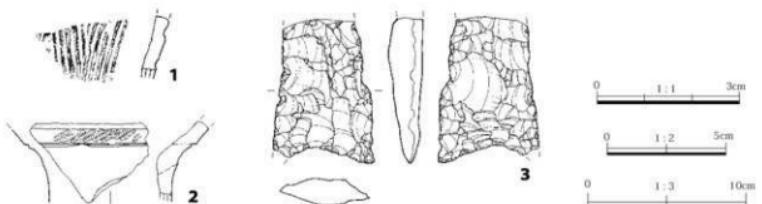
拳大の礫を多含する褐色粘土が基調で、人為堆積を示す。 **平面形と規模** 平面形は不整梢円形。規模は長軸174cm、短軸118cm、深さ13.5~36cm。 **主軸方位** N-62°-W **壁面** 外傾して立ち上がる。 **底面** 東半分が一段深く、上下段ともに概ね平坦。**遺物** なし。**備考** 磨は東側の一段深い範囲に集中し、土層も浅い西側が切る形になっているため、別の遺構に分かれる可能性がある。掘り込みは2面で確認されたが、礫自体は1面目で検出されていたため、古代末から近世前半ごろと考えられる。



第297図 SK01実測図(1/30)

## 第4節 遺構外出土遺物 (第298図/第44表/P L 43)

調査区の西側の高地上で縄文土器の深鉢片2点、弥生土器の壺片1点、古代土器の甕片12点、須恵器の杯・椀・頬片3点が発見された。4号トレンチの下層では遺物・遺構は発見されなかった。他に表土から縄文土器の深鉢片1点、石器3点、近世の陶磁器片2点、近現代の目薬瓶1点、石英の自然石1点が発見された。このう



第298図 遺構外出土遺物実測図(1/1・1/2・1/3)

ち、縄文土器 1 点、石器 1 点を図示した。また SI01 の覆土から縄文土器の深鉢片 1 点、弥生土器の壺片 2 点、剥片 2 点が出土しているが、混入物であるため本節で取り扱い、このうち弥生土器 1 点を図示した。

## 第 5 章まとめ

本遺跡では、1 面で 2 ~ 3 段の石積 4 条を作り、低い段差の棚田状の水田が検出され、2 面で竪穴住居跡 1 軒と陥れ穴 1 基、土坑 5 基が検出された。

1 面の石積の覆土から近世の染付碗片と近現代の陶磁器片が出土している。また地権者からの聞き取りから少なくとも大正以前に埋め立てられたと推定され、近世から近代に使用されたと考えられる。2 面は、SI01 が出土遺物から 10 世紀前半、SI01 に切られた SK04 がそれ以前、SI01 を切る SK01 は 1 面目で礫が検出されていたことから古代末から近世以前、その他の土坑は 2 面目で確認されたことから SI01 に近い時代とした。

SI01 は調査区の南側（山側）の湿地の北脇に建っているが、周囲では住居跡は発見されず、山奥にたった 1 軒のみで集落ではないという通常とは異なる状況である。何か特別な意味があるのかもしれないが、出土遺物はこの時期の他の竪穴住居跡（例えば、上野 I 遺跡の竪穴住居跡）と変わりがなく、遺物からは何らかの特別な意味はみとめられなかった。

本遺跡は、山中にあり、山の麓からは視認できない場所にある。高い尾根と深い谷や森林に囲まれ、容易にたどり着けるような立地ではない。古代では一軒家の隠れ里的であり、近世以降でも隠田的な場所かもしれない。今後、こういった事例が他にないか探す必要があろう。

第 43 表 横壁勝沼 III 遺跡平安時代住居跡属性一覧

遺跡名	長軸方向	面積 (m × m)				主柱配置	カマド	位置	構造面	周溝	付帯施設	遺物				時期	
		主軸	副軸	壁高	面積							灰陶	墨書	羽墨	鐵製品	鐵滓	
SI01	N-81°・E	552	404	34	< 19.18 >	不明	東壁	—	—	—	—	○	—	—	—	—	10 世紀前半

第 44 表 横壁勝沼 III 遺跡出土遺物観察表

SI01 出土遺物観察表

調査名	回数	器種	法量 (高さ/口径/底径) (cm)	特徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
292- 1	43	土器部・裏	(9.5) / < 20.0 > / —	内面とモルタル部は指揮き込みの直角ナギ。頭部から全体にかけて内外面とも指揮き込みのチラリ。その外側部は頭部へラケツイのちひきで調節。底部の張り出しが無い。	酸化焰・良好	砂粒・褐色粒	にぶい相	口縁部～中腰部 底部 20% SI01 残存。 下縁
292- 2	43	頭部器・羽墨	(2.6) / — / < 9.2 >	ロクロ整形。底部回転式切り返し。内面面外ロクロナデ。底部内面面ロクロナデ。	酸化焰・良好	石英・長石・砂粒	灰黄褐色 にぶい黄褐色	底部 30% SI01 下縁
292- 3	43	頭部器・体	(1.4) / — / < 6.6 >	ロクロ整形。底部内面面ロクロナデ。外面面外ロクロナデ。外面ナデ。頭部の張り出しが残るが、底石として使われたもの。	酸化焰・良好	石英・砂粒	にぶい黄褐色 にぶい褐色	底部 40% SI01 残存。
292- 4	43	頭部器・体	(1.5) / — / < 6.8 >	ロクロ整形。底部内面面ロクロナデ。内面面外ロクロナデ。底部に穴が開いていたため補修している。	酸化焰・良好	長石・砂粒	灰黄褐色 にぶい黄褐色	底部 40% SI01 残存。
292- 5	43	頭部器・杯形	(1.3) / — / < 6.8 >	ロクロ整形。台面貼付痕が残る。底部内外面ナデ。	酸化焰・良好	石英・角閃石・砂粒	浅黄	底部 50% SI01 下縁
292- 6	43	頭部器・杯形	(4.2) / < 16.0 > / —	ロクロ整形。内外面面外ロクロナデ。下縁部は酸化焰焼成。	酸化焰・良好	石英・角閃石・砂粒・黑色粒	灰白・灰黄	底部 10% SI01 残存。 下縁
292- 7	43	頭部器・也	(16.8) / — / —	ロクロ整形。内外面面外ロクロナデ。點土組の接合痕跡あり。	還元焰・堅	砂粒	灰	頭部 20% SI01 中腰 残存。

SW01 出土遺物観察表

調査名	回数	器種	法量 (高さ/口径/底径) (cm)	特徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
296- 1	43	磁器・罐	(2.7) / — / —	肥厚系付脚。外面に草文 (印文) のような單線草の文様。内面無文。返足。	堅緻	灰色粒	灰白	破片資料 (口縁部) SW01

遺構外土遺物観察表

調査名	回数	器種	法量 (高さ/口径/底径) (cm)	特徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調(外面/内面)	備考
298- 1	43	縄文土器・脚	(3.9) / — / —	外面に平底付脚による平行沈文を複数。前後後平 (清瀬式)。	良好	石英・砂粒	灰・灰黒	破片資料 (体部) SW01
298- 2	43	青玉土器・也	(3.3) / — / —	口縁部に単純 LK 織文施文。粘土胎の接合痕跡明瞭。余分初頭か。	良好	長石・砂粒	相・明暗	破片資料 (口縁部) SW01 下縁
298- 3	43	新石器石器・石器	長 (3.0) / 幅 2.0 / 厚 0.7	重量 5.1g。火照部・脚部欠損。凹面。石材は黒曜石の可能性あり。	—	チャート	—	一部欠損。 表土上縁